

令和3年2月14日

## 学位論文審査並びに最終試験結果報告書

大学院心理科学研究科長 殿

主査 富家直明



副査 中野倫仁



副査 野田昌道



副査 本谷亮



このたびは、由依にかかわる学位論文審査並びに最終試験を行い、下記の結果を得たので報告する。

記

1 学位論文題目 薬物使用者の家族の非機能的認知が精神的健康に与える影響についての実証的研究

2 論文要旨 別添

### 3 学位論文審査の要旨

本論文では、薬物使用者の家族の非機能的認知の内容を明らかにした上で、薬物使用者の家族の非機能的認知を測定できる尺度を作成し、薬物使用者の家族の非機能的認知が精神的不調と well-being という精神的健康の二側面に与える影響を実証的に検討することである。第1章において、薬物使用者の家族は精神的健康が損なわれやすく支援が必要であること、薬物使用者の家族に対する支援として認知行動療法があげられることについて論述され、家族のストレスと支援に至るまでの課題、家族に生じる非機能的認知と精神的健康の関係について整理がなされた。加えて薬物使用者の家族の精神的健康を精神的不調と well-being の二側面から検討することが必要で

あること主張した上で、認知行動療法によって家族の非機能的認知が変化するのかどうか、家族の非機能的認知が家族の精神的健康にどのような影響を及ぼすのかを研究主題として設定した。

研究1では、家族を対象に認知行動療法を行っている研究に焦点をあてシステマティックレビューを行った。その結果、家族の非機能的認知を効果指標を用いて検討している研究はひきこもりの家族を対象とした研究のみであった。薬物使用者の家族の非機能的認知は効果指標を用いて測定されておらず、認知行動療法によって薬物使用者の家族の非機能的認知が変化するのかどうか、家族の非機能的認知が家族の精神的健康にどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにすることは出来なかった。

第2章と第3章では、家族の精神的健康を回復・促進させるために必要と考えられる非機能的認知についてより詳細に検討するため、家族の非機能的認知を測定する尺度を作成し、家族の非機能的認知が家族の精神的健康を説明するかどうかを実証的に確認した。研究2-1で、薬物使用者の家族および家族を支援する医療専門職を対象に調査票の実施または調査票に基づく半構造化面接を行い、自責、無力さ、孤独、自身の将来への悲観、本人の将来への悲観、他の家族への影響、仕事への影響、取締や逮捕の可能性、責任、現状への不満、薬物使用への疑惑、否認、周囲との軋轢、といった61項目13のカテゴリーの質問紙用項目プールを収集した。これらは臨床経験が長い精神科医による校閲を受け、最終的に60項目の非機能的認知項目リストとなった。その後、同尺度の因子数および因子構造の確認を行い、非機能的認知の心理学的構造を明らかにした(研究2-2)。その結果、家族の非機能的認知は、「将来や薬物使用者に対する否定的な考え」、「家族の孤立」、「責任」の3因子構造からなることが明らかとなった。

また、各因子のCronbachの $\alpha$ 係数は.83~.93であり十分な値であったことから、信頼性の下界が保証されていることが示された。第4章では、研究2で作成された家族の非機能的認知を測定する尺度の再検査信頼性と外的基準との比較による併存的妥当性を検討した。その結果、級内相関係数(ICC)は.803(95%CI=.657 to .890)であり、十分な再検査信頼性を備えていることが示された。また、非機能的態度を測定するDAS24-Jおよび知覚されたストレスを包括的に測定するPSSとの間に中程度の相関係数(DAS24-J:  $r = .32 \sim .34$ ,  $p < .05$ , PSS:  $r = .37 \sim .42$ ,  $p < .01$ )が確認されたことから併存的妥当性が確認された(研究3)(掲載論文; 辻・青木・坂野(2020). 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 55(1), 25-38)。第5章において、家族の非機能的認知が、精神的不調とwell-beingといった精神的健康の二側面を説明するかどうかについて検討した。その結果、家族の非機能的認知は、精神的不調は説明するが( $SE = .17$ ,

95%CI = 0.093 to 0.745)、well-being は説明しないことが明らかとなった ( $SE = .05$ 、95%CI = -0.152 to 0.032) (研究 4) (掲載論文; Tsuji, Aoki, & Sakano (2020). *American Journal of Family Therapy*, doi: 10.1080/01926187.2020.1783387)。

以上を踏まえて第 6 章ではそれぞれの研究の成果を概観した。具体的に、薬物使用者の家族の非機能的認知の内容を明らかにし、家族の非機能的認知を客観的に測定する尺度を作成したことによって、家族の問題や状況をより具体的に把握できることを示唆した。また、家族の非機能的認知が精神的不調を説明すること、および well-being は説明しないことを実証的に明らかにした。本研究の結果から、家族の精神的不調の回復において、非機能的認知が重要な役割を担うことが示唆された。最後に、今後はより幅広い薬物使用者の家族を対象として非機能的認知を検討すること、well-being に影響を与える要因を精査すること、そして非機能的認知の変化を目的とした介入を行った際の効果を明らかにする必要性を指摘した。

審査の過程にて、用語の定義の見直しや論理構成の一部修正がなされると共に、本研究の今後の社会的応用について深い議論が行われた。辻氏の論文は、薬物使用者家族の支援に関する公認心理師の活躍の幅を広げる重要な研究であると評価された。

本研究の大部分は、以下のようにすでに査読付き雑誌に掲載もしくは掲載が決定している。

(1) Tsuji, Aoki, & Sakano (2020). *American Journal of Family Therapy*, doi: 10.1080/01926187.2020.1783387

(2) 辻・青木・坂野 (2020). 日本アルコール・薬物医学会雑誌、55(1)、25-38.

#### 4 最終試験の要旨

最終試験では、学位論文の内容に関する口頭発表及び質疑応答を行うとともに、申請者のこれまでの研究業績を精査し、さらに、外国語を含む専門的知識と技術に関して口述試験を行った。その結果、申請者は研究を遂行する能力が十分にあるとの判断に至った。

以上の結果 辻 由 依 は

博士（臨床心理学）の学位を授与する資格の ある もの

ない

と判定する。